

C. トウルベツコーイの『エウテュデモス』論について

根村 亮

はじめに

本稿の目的は、セルゲイ・トウルベツコーイの『エウテュデモス』論を分析することにある¹。彼の『エウテュデモス』論は、1903年に刊行された『プラトン作品集第二巻』の作品解説のために執筆された。本来この作品集は、ウラジーミル・ソロヴィヨフにより編集されることになっており、作品解説はすべて彼が執筆するはずであったが、『プラトン作品集第一巻』刊行後にソロヴィヨフが死去したため、第二巻の編集はトウルベツコーイにより行われ、作品解説についてはソロヴィヨフの原稿がある場合はそれを使用し、ない場合はトウルベツコーイが新たに執筆するという形を採った。そして『エウテュデモス』の場合はソロヴィヨフの原稿がなかったのでトウルベツコーイが執筆したのであった。作品集の解説であれば、それまでの定説を踏まえて極めて常識的な記述を行うのが普通であるが、ここでのトウルベツコーイの叙述は極めて個性的であり、「論」と呼んで構わない独特の内容となっている。

1. 『エウテュデモス』について

プラトンの作品の内容を紹介するのは、様々な点で困難であり省略したいのだが、『エウテュデモス』がプラトンの作品の中ではどちらかと言えばあまり有名ではないものに属すうえ、問題点をそれなりに整理しておく必要があるので、まずこの作品について述べておきたい。

周知のようにプラトンの作品の執筆時期、さらにはどの作品とどの作品の間に執筆されたのかという執筆順序を定めることは極めて困難であり、様々な分野の研究の進展によりそれなりの成果が出ているとはいえ、専門家の見解は依然として一致をみてはいない。従ってこの作品の執筆時期や執筆順序も確定していない。プラトンの執筆時期を二つに分けた場合は前期の後半、三つに分けた場合は中期というのが一応の定説のようである。しかし作品の執筆年代の確定という問題は、作品解釈の問題と非常に密接に連動するので、本稿ではこれ以上深入りすることはできない。

作品の構成は、非常に凝っているが明確である。ソクラテスがクリトンについて先日の出来事を物語る形式が採用されている。先日の出来事とはソクラテスが、著名なソフィスト

¹ トウルベツコーイの生涯等については、根村亮「C. トウルベツコーイのロゴス論について」『プラトンとロシア』(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集第12号)、北海道大学スラブ研究センター、2006年、35-37頁を参照。

の兄弟であるエウテュデモスとディオニュソドロスとみんなの前で繰り広げた対話である。したがってこの対話が『エウテュデモス』の主要部分となるのだが、途中で一度中断され、ソクラテスとクリトンの回想的な対話が挿入され、さらに最後もこの二人の対話で終了する。つまり形式的には『エウテュデモス』は五部の構成になっている。

この前奏曲とエピローグを形作る対話が様々な問題性を孕んでいるのであるが、それについては後述することにしよう。

まず前奏曲に当たる部分では、クリトンがソクラテスに昨日彼が聞くことが出来なかったソクラテスとエウテュデモス達との対話の内容を尋ねることから開始される。ソクラテスは会話の内容を語って聞かせるが、その際には自分は兄弟に弟子入りするつもりであり、クリトンと息子達も一緒に弟子入りしないかと誘う。こうして昨日の対話が回想される。

主要部分はソクラテスが、エウテュデモスとディオニュソドロスにその場にいる人々、とくに若者のクレイニアスに彼らの智恵を見せてくれるよう頼むことから開始される。特筆すべきは、通常は対話において他人を苛立たせる議論を展開するのはソクラテスなのに、この作品ではエウテュデモスとディオニュソドロスがもっぱらその役割を演じる。この作品の副題として「争論家」という副題が付けられているのは、この二人が代表的な争論術の使い手だからである。エウテュデモスは弟ではあるが議論は兄のディオニュソドロスよりも鋭いので、いわば代表として題名に用いられていると言われている。この兄弟の争論術とは要するに詭弁である。後にアリストテレスが詭弁を様々な形で分類する際の資料の一つとなっているのがこの作品なのである。

ソクラテスの丁寧な依頼にもかかわらず、兄弟はクレイニアスを得意の詭弁により翻弄する。これに対しソクラテスは、まず自分が知恵と徳を考えるのかを彼の独自の対話法により誘導するので、それを参考にして話を進めて欲しいと兄弟に提案し、いわば「お手本」を示す。しかしこのお手本にもかかわらず結局兄弟は詭弁を止めようとはしない。そこでクレイニアスの愛人のクテシッポスは兄弟のこうした人を愚弄するような詭弁に腹を立てて、兄弟に抗議し始めて論戦は盛り上がる。やがてソクラテスはクテシッポスを宥めて再びクレイニアス相手に先ほどの対話の続きを行うことを提案し、対話が再開される。

ここで再びソクラテスとクリトンの回想が挿入されることにより主要部分はいったん中断されるが、この回想シーンは短く終わり、再び対話の場面に舞台は戻るが、ここで再び対話に兄弟が参加して来る。例によって兄弟は再び詭弁を弄するが、兄弟の詭弁をかなりの程度習得したソクラテスたちは、見事にこれに応じられるようになる。かくして論戦は一層激しく盛り上がってゆくが、エウテュデモスとディオニュソドロスの詭弁もますますひどくなり、とくに弟のエウテュデモスの放った詭弁にはソクラテスは驚き呆れはてて倒れ込んでしまう。すると聴衆は全員が兄弟を賞賛して喝采をおくるのであった。そこでソクラテスは「だから私は、自分の方でもまだこんなに知恵のある人間は一人も見ることがないということを、承認するようなそんな気分にした、そして彼らの知恵に全く屈服させられて、彼らを賞賛する方へ気が変わったのだ²」と述べて、二人に賞賛の言葉を贈り、

² プラトン著、山本光雄訳『プラトン全集 8 エウテュデモス、プロタゴラス』岩波書店、

自分たち二人を兄弟の弟子にして欲しいと頼んで、中心部分は幕となる。但しもちろん最後のソクラテスの言葉は文字通り受けとめることは出来ず、二人におくっている「賞賛の言葉」にも毒や棘がちりばめられているようである。

多くの研究者達が指摘しているように、最後の場面は異様な雰囲気醸し出している。ここには何ともいえない不快感があからさまに表明されているのであるが、これが読者にとまどいを与える。まず話し終えたソクラテスが、クリトンにも自分と一緒に弟子入りしないかと勧誘するのだが、クリトンは実はソクラテスがエウテュデモスたちと論戦しているところを目撃したという人物と自分が会ったことを告白し、彼がエウテュデモスとディオニュソドロスを極めて強く非難すると同時に、彼らとみんなの前で対話を試みたソクラテスをも非難していたことを教える。これに対しソクラテスはこの人物が、哲学と政治の中間に従事する者で最終的にはどちらにも劣る人物であると批判する。そして一緒にエウテュデモスとディオニュソドロスに弟子入りしないかと再度誘うが³、クリトンは気乗りしない。最後に自分の子供の教育を委ねる者がいないことを不安視するクリトンを慰めて、『エウテュデモス』は終わる。

『エウテュデモス』はプラトン哲学を語る際にもあまり採り上げられることのない作品である。ロシアで刊行されている四巻本選集にも収録されていない。だからといって作品として低く評価されているというわけでもない。19世紀からこの作品については「喜劇性」が強調されてきた。しかしこの「喜劇性」というのが様々な問題性を内包しているのである。どこが喜劇なのかと言えば、それは対話における詭弁ということになるだろう。確かに実際にこの対話のもっとも盛り上がる部分は、エウテュデモスたちが詭弁を連発し、それに対しソクラテスたちがこれを見破りつつかなり詭弁に近い形でこれに応戦する場面である。作品の構成もこの部分を頂点にして組み立てられている。ソクラテスが模範的な自分の対話方法を示す部分は、これに比べると盛り上がりには欠ける。しかしこの詭弁というのは、実際には言葉の発音や意味の多様性を利用した、いわば言葉遊びというかだじゃれに近いものによって形作られている。だから正直なところ筆者のようにギリシャ語が判ら

2005年、97-98頁。

³ このように本来はソフィストと対立するはずのソクラテスが、最初と最後の部分でこのソフィストの兄弟に弟子入りしようとすることは、不可思議である。カーンはこの謎は、19世紀段階で既に解明されたと述べている。つまりこれはソクラテスの痛烈な皮肉であるというのである。Charles H. Kahn “Some Puzzles in the *Euthydemus*,” in Thomas M. Robinson and Lus Brisson, eds., *Plato Euthydemus, Lysis, Charmides: Proceedings of the V Symposium Platonicum Selected Papers* (Sankt Augustin: Academia Verlag, 2000), p. 88. しかしこれで完全に解明されているとは著者には思えない。ここでの話し相手であるクリトンに対する何らかのメッセージ、あるいはクリトンとの微妙な関係性といった点をも考慮すべきだろう。なおウォーターフィールドはエピローグの注釈で、「多分クリトンは最近死去し、これは正直だが真の哲学者ではない（我々はクリトンが哲学的著書を書き上げたとは聞いているにもかかわらず）人物をプラトンが追憶したものである。」と述べている。Robin Waterfield, “Introduction to *Euthydemus*,” in Trevor J. Saunders, ed., *Plato: Early Socratic Dialogues* (Harmondsworth, UK: Penguin Books, 2005), p. 372.

ない者には、この言葉遊びが醸し出す本当のおかしさは理解出来ないのである。しかも「喜劇性」と言うとなんだかもっともらしいが、要するにエウテュデモスたちは一種の「ぼけ」の役割を演じ、これに対しソクラテスたちは「つつこみ」の役割を演じているのである。こうしたいわば漫才のような作品を哲学作品として読むということはかなり厄介な問題を引き受けることになる。むしろ深刻に哲学的に論じること自体が、何だか滑稽に思われてしまう危険性を持っているからである。

だからプラトン哲学を論じた著作でこの作品が登場することは比較的少ない。作品の執筆年や執筆順の問題を扱う際に言及されるというのが最も一般的であり、それ以外となると、ソクラテスとクレニアスの模範的対話の分析、詭弁の分析、最後のクリトンとのエピローグの意味を考察する試みなどが行われている。もちろんプラトンの作品であるからには、『エウテュデモス』を単独で扱った論文集や、あるいは作品集の解説や注釈も刊行されており、それなりに様々な観点が出されているが、それらを読んでも逆にこの作品を哲学的に扱う難しさを痛感させられる。

本稿では、最初にトゥルベツコーイの『エウテュデモス』論を紹介し、その後でとりあえず現在一般的にこの作品がどのように論じられるのかを見る。その後トゥルベツコーイの同時代の研究がどのようにこの作品を論じていたのかを参照しつつ、トゥルベツコーイの『エウテュデモス』論を分析して、その特異性の原因を探るという形を採りたい。

2. ソロヴィヨフの『エウテュデモス』論

トゥルベツコーイの『エウテュデモス』論を考察する前に、ソロヴィヨフの考え方について少しばかり触れておく必要がある。トゥルベツコーイはソロヴィヨフの仕事を実誠的に引き継いでいるという自負を明らかに持っており、結局書かれずに終わったソロヴィヨフの仕事が少しでも読者に紹介しつつ、自分の『エウテュデモス』論がそれに対して肯定的にであれ、否定的にであれ、どのような関係性を持っているのかを出来るだけ明らかにすることを志していたからであった。

ソロヴィヨフは単独で『エウテュデモス』を論じる機会はなく、概括的なプラトン論で若干それに言及したに留まっていたにすぎなかったが、トゥルベツコーイは個人的にこの作品に関してソロヴィヨフと議論しており、この点も追加する形でソロヴィヨフがどのように『エウテュデモス』を考えていたのかが興味深く語られている。

ソロヴィヨフは、『エウテュデモス』、『プロタゴラス』、『ヒippias (大)』、『ヒippias (小)』を、当初はソクラテスの生涯の最後の時期に書かれた作品と考えていた。その一方とくに『エウテュデモス』と『プロタゴラス』はその後になってからプラトンが書き直しているのだと主張していた。その後、ソロヴィヨフは『プロタゴラス』については論文を発表して、この作品がプラトンの筆によるものではなくキュレネ学派の創始者であるアリステイッポスによって書かれたという大胆きわまりない結論に至る⁴。他方結局『エウテュ

⁴ 詳しくは、根村亮「二つの『プロタゴラス』論：B. ソロヴィヨフと C. トゥルベツコーイ」『プラトンとロシア II』(21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報

デモス』については、ソロヴィヨフは何も書き残さなかった。

しかしトゥルベツコーイは、ソロヴィヨフがこの作品に関していくつか興味深い発言をしていることを紹介している。まず彼はこの作品は、中心部分の最後の部分、つまりエピローグとしておかれたソクラテスとクリトンの会話の前のところまで終わっていると主張していた。そしてこのエピローグについては、後になってプラトンが付け加えた部分であり、しかもこの部分は最後まで書き上げられることなく終わっており、その意味では『エウテュデモス』は未完であるというのである。しかもソロヴィヨフによれば、この書き加えた部分は、対話篇本編からは全く逸脱した内容になっており、ソクラテスとエウテュデモスたちの双方を批判した「哲学と政治の中間に従事する者」に対するプラトンの答えであった⁵。

他方トゥルベツコーイは、エウテュデモスとディオニュソドロスという詭弁を連発するソフィストの姿は、たとえ二人が実在する人物であるにせよ、何らかの人物や思想の象徴であり、ドイツの研究者たちが指摘しているようにそれがキニク学派ということはあるまいだろうかというかなり具体的な問いかけをソロヴィヨフに対して発しており、これに対しソロヴィヨフは、「あり得るね。とっても残酷にプラトンは彼らを罵っていたからね。」と答えており<9>、後に見るようにトゥルベツコーイの『エウテュデモス』論は、この答えに自信を得てこの考え方を拡大したものである。

3. トゥルベツコーイの『エウテュデモス』論

トゥルベツコーイの出発点は、ドイツの研究者によって言われていた見解、すなわちエウテュデモスとディオニュソドロスという二人の実在するソフィストは、キニク学派の開祖と言われているアンティステネスを戯画的に茶化した姿であり、二人の馬鹿げた詭弁はアンティステネスに対するプラトンの痛烈な批判であるという考え方である。先ほど見たようにソロヴィヨフの賛同を得たトゥルベツコーイは、この観点を徹底的に拡大して次のように結論づけている。

『エウテュデモス』を考察しつつ私は、プラトンはこれを書く際に部分的にではなく全面的にキニク学派を念頭に置いていたという結論に至った。対話篇全体がアンティステネスの争論術、弁証法、認識論に対する全面的な皮肉である。かくして私には、このような理解だけがこの作品を部分的にも全面的にも我々を理解させる唯一の説明であると思われる<9>。

トゥルベツコーイの解釈ではエピローグで言及される「哲学と政治の中間に従事する者」は実際にはイソクラテスを示している。実はこの解釈自体は、後で詳しく見るように極め

告集第 20 号)、北海道大学スラブ研究センター、2007 年、46-49 頁を参照。

⁵ Трубецкой С.Н. Рассуждение об Евтидеме // Приложение к «Собранию сочинений Кн. Сергея Николаевича Трубецкого. Т. 5 и 6». М., 1912. С. 9. これがトゥルベツコーイの『エウテュデモス』論であり、本稿では以降ここからの引用等については本文中に<>内にページ数を記す形を採用する。

て普通の判断であるが、極めて特徴的なのは、イソクラテスをプラトンのではなくソクラテスの敵対者と考えるという点である。他方エウテュデモスとディオニュソドロスは、直接的にはソクラテスの思想と対立していないと解釈するのである。イソクラテスこそ「言葉をもてあそぶ者」たる演説の作家であり、彼の基本的な哲学的なあり方はソクラテスの哲学と完全に対立するのであり、これに対して詭弁を弄する兄弟はソクラテスの哲学に本質的に対立するものを明確には持っていないと解釈する。そして兄弟の詭弁の中に何らかの哲学的な論争的な傾向を見るとすれば、それはソクラテスの哲学ではなくプラトンの哲学に対決するものであるという結論を引き出す。その際には再びソロヴィヨフの意見が採用され、ディオニュソドロスの詭弁 300E-301A が、プラトンのイデア論に対する示唆であると理解するのである⁶。これにより『エウテュデモス』はプラトンが自分の学説に対するこうした批判を受けている時期に、こうした批判を再批判する目的で書かれたのだと主張するのである⁷。こうしたプラトン批判（実際にはプラトンが自分に対する批判を自分の作品の中で描いているにすぎないわけだが）については、部分的にはメガーラ学派にも該当する部分はあるが、もっとも鋭い形で該当するのはキニク学派であるとトゥルベツコーイは主張する。彼は、こうした考え方はボニツ、ツェラー、デュムラーといった権威あるプラトン研究者によって主張されてきたことを紹介しつつも、その際にはこの兄弟の詭弁の個々の特徴の中にいくつかキニク学派を思わせる部分があることを指摘しているに留まっており、彼は兄弟の詭弁全体の背後にある哲学的な思想に、キニク学派の哲学、とくにアンティステネスの哲学を見いだすことを提案するのである。というわけで哲学研究者達はここで結局は丁寧に詭弁を分析して、それらの詭弁がどのような哲学をあらわしているのかを研究することに至る。詭弁の分析というと極めて深刻な問題のようであるが、だじゃれを大げさに受け取って、これを意味ありげに解説しているとも言える。というよりも、あのナンセンスな詭弁を真剣に哲学的に考察するというのは、どうも滑稽に思われるのだ。もっともこの場合は哲学と言っても論理的な分析が主要課題となる。

では兄弟の詭弁からどのような哲学が導かれるのかというと、それは徹底的な不可知論である。主に 303D-E におけるソクラテスによるエウテュデモスとディオニュソドロスの争論術に関する解説を利用して、一般的な定義を形成することが常に不可能であり、その結果あらゆる判断が不可能にされているような哲学がこの対話篇で問題となっていると解釈し、この立場はアンティステネスの哲学的な立場と同じであると考えるのである。トゥルベツコーイによれば、アンティステネスの哲学においては、ものの一般的性質、タイポロジー、普遍的性質を定めることは不可能とされ、実際には単に個別の対象が存在している

⁶ なおトゥルベツコーイ自身による、プラトン作品の分類では、『エウテュデモス』はイデア論が創られつつあった中期の作品ということになっている。Трубецкой С.Н. Собрание сочинений Кн. Сергея Николаевича Трубецкого. Т. 5 и 6. М., 1912. С. 12.

⁷ トゥルベツコーイはエウテュデモス達の詭弁は、プロタゴラス、ヒッピアス、ゴルギアス、プロディオコスなどのソフィストの学説とは異なった傾向を持つと主張している。但し後に見るようにアンティステネスは、ゴルギアスの弟子であることから、二人の共通性は認める。

にすぎず、我々はそれを単に名付けているにすぎないとして、確実な認識の可能性は否定されていた。だからトゥルベツコーイはアンティステネスの哲学を「唯名論」と呼ぶ。

このような叙述〔作品中のソクラテスによるエウテュデモスらの性格付け 303D〕の意味は以下のようなものである。すなわちどんなものであれ一般的な定義、一般的述部、一般的概念の可能性を否定しつつ、エウテュデモスと彼の兄はあらゆる判断あるいは主語と述語の結びつきの可能性を根絶している。このような叙述は我々の対話篇〔『エウテュデモス』〕のソフィズムを理解する鍵を与え、アンティステネスの極端な唯名論にこれ以上近づきようがないほどである。アンティステネスは、名付けることはできるが定義はできない単に個別の対象が存在するだけであると認めて、一般的概念や定義の可能性を一般的性質の可能性同様に否定しているまさにその人である。ここから彼は個々の別々の対象については、その「固有」の概念を内包しているただ一つの「ことば」だけが現れ得ることを証明しようとした。例えば「人間は善良だ」とは言えない。なぜなら人間は人間であり善ではなく、善は善であり、人間ではないからである。[...] ここからアリストテレスとその注釈者の証言によれば、アンティステネスは矛盾、嘘、誤解が不可能であるという点に関する純ソフィスト的学説を導きだしている。我々はもの「固有な」概念を述べているのかあるいはそれを述べていない、あるいはより正確に言えば他のものの概念を述べているのだから、矛盾は不可能である<12> [強調は原文]。

このように主部と述部の一致がない限りそれを偽とする立場は、あらゆる言論の可能性を根絶させてしまう。そしてさらには、様々な表現は個別的なものを示しているにすぎないのであるから、ある見解に対立する見解も存在し得ないということになる。ここから矛盾、嘘、誤解の可能性も否定されていく。トゥルベツコーイは『エウテュデモス』におけるディオニュソドロスの詭弁（285E）に、この議論の反映を見ており、実際にはこれがアンティステネスの思想を示していると主張している。

つまり言葉尻をとらえるような滑稽観を漂わせているこのソフィスト兄弟の詭弁には、実はアンティステネスの哲学的立場が表明されているのであり、プラトンはアンティステネスを諷刺すると同時に彼の哲学的立場を根底的に批判しているというわけである。このアンティステネスの立場をトゥルベツコーイは「反論理主義」と説明している⁸。あらゆる論理的な説明は不可能あるいは不条理へと追い込まれる。なぜなら主部と異なった述部を持つ名辞は、成立しないあるいは真ではないのだから。こうしたソフィスト的な、一方では何事も語れないし、他方では何事も語れるという両極端な立場を使い回して、理論的な知識、理論的な認識を不可能にさせて、総合的な判断や一般的定義を成立させないことが、アンティステネスの哲学なのであった。

⁸ この術語自体は、トゥルベツコーイによって創られたのではなく、ギリシャ哲学の用語であり、アンティステネスの哲学にも適用される。但しトゥルベツコーイの場合は、意味がより広く拡散されている。

トゥルベツコーイによれば、こうしたアンティステネスの哲学に対して、ソクラテスの対話法を利用して、独自の認識理論、イデア論を形成していったのがプラトンであり、『エウテュデモス』にはまさに彼らの対立が現れているのであった。アンティステネスの「唯名論的個体主義」にプラトンは「抽象的普遍主義」を対置させたというのが、トゥルベツコーイの描き方である。彼は次のように言う。

このように『エウテュデモス』はソクラテスとソフィスト達との闘争の反響ではなく、ソクラテス学派の内部の闘争の反響のように我々には思われる<19>。

この結論はかなり大胆である。アンティステネスは、ソクラテス死後における権威ある後継者の一人であり、プラトンと対立関係にあったことは歴史的事実としてほぼ認められている。彼については詳しくは後述するが、ここではトゥルベツコーイの哲学的見解を少し見ておく必要があるだろう。極めて単純化すると、彼にとってソクラテスは理解することの重要性、そして獲得された知識の実践性を強調した点で極めて哲学的に大きな存在であり、彼の『ロゴスに関する歴史上の学説』や『古代哲学史』においてはソクラテスに多くのページが割かれているとともに、ソクラテスの哲学的遺産がどのように継承されていったのかを丁寧に描くために、いわゆる三つのソクラテス学派にも重点が置かれている。そしてプラトンは、こうしたソクラテスの様々な継承者の中から真の継承者として登場することになり、ソクラテス学派はいわばプラトン哲学において一定の役割を果たした対立思想として描かれている。但しその際には、アンティステネスの哲学がこれほどまで強調されることはなかった⁹。したがってこの点では、この解説論文を書くにあたって、これまでとは異なった理解が、トゥルベツコーイに浮かんだのだと考えるべきであろう。

4. 『エウテュデモス』はどのように理解されているのか

『エウテュデモス』がどのように論じられているのかについては、ここで全面的に取り扱うことはもちろん不可能であり、トゥルベツコーイの『エウテュデモス』論との関係において重要と思われる根本的な部分だけを見ていく。つまりトゥルベツコーイはアンティステネス批判の目的で書かれたと述べているので、この点が一般的にはどのように把握されているのかを見ていく。

しかしこの作品の目的とは何かという根本的問題は多くのプラトン研究者を悩ませてきた。そもそもプラトンを劇作家として理解して、「新作として喜劇を書く必要があったから」と考えればこうした問題に取り組む必要性は薄まるのであるが、哲学者の哲学的著作として理解するとこの問題を回避することは出来ない。しかし喜劇的な性格、エピローグに出てくる不快感など、理解するのが困難な要素が極めて多い。もちろん研究者の中には、極

⁹ Трубецкой С.Н. Учение о Логосе в его истории // Собрание сочинений Кн. Сергея Николаевича Трубецкого. Т. 4. М., 1906. С. 20-22; Трубецкой С.Н. Курс истории древней философии. Часть первая // Собрание сочинений Кн. Сергея Николаевича Трубецкого. Т. 5. М., 1912. С. 238-248.

めて常識的に、ソクラテスの対話法とエウテュデモスたちのソフィスト的な論法との対照を示し、ソクラテスの方法の適切性を訴えるために書かれたと考える者もいる¹⁰。一応多数の人間がこうした常識的な判断を支持しているのであるが、このような見た目通りの考え方では説明が不十分であることは、専門家たち自身が痛感しているようである。というのもエウテュデモスとディオニュソドロスが繰り広げる詭弁は、同じソフィストの議論といってもプロタゴラスに代表されるような理論とは全く異なった種類の単なる詭弁であり、彼らの詭弁から導かれる思想とソクラテスの思想をまじめに比べること自体が、大きな意味を持つとはいいにくいからである。ソクラテスの対話法がこうした詭弁よりも優れているということは、あまりにも自明であり、それを言うためにこの作品が書かれたというのはあまりにも平凡すぎ、むしろこの作品の持っている滑稽さを真面目に解釈しすぎている印象を与えてしまうのである。もちろん滑稽さには目をつぶって、兄弟の詭弁を丁寧に論理的に分析して、ソクラテスが打ち破ろうとした哲学に迫るという方法もあり、これを採用している研究者もいるが、これでは不十分と考える研究者も多いのである。

そこで研究者たちの多くは苦肉の策として、テキストの内容が持っていると思われる目的と、歴史的な背景から推測される目的とを分けて考察するという方法を採用している。つまり前者のテキストから純粹に読み取れる意義とは別に、歴史的背景を考察して、プラトンが標的とした敵を推測するという解釈を付け加えるのである¹¹。

そんなわけでこの実在する兄弟の描かれた姿や論法を、ソクラテスとソフィストの対立という歴史上の対立として把握しないで、プラトンがこの兄弟をプラトンの同時代の誰かを嘲笑して攻撃するために用いたのではないかという解釈が出てくるのは、極めて当然である。そこでプラトンが敵として念頭に置いていた人物捜しが行われるのであるが、その際にまず考えられるのは、エピローグで登場する「哲学と政治の中間に従事する者」である。これは以前からイソクラテスのことを示唆しているのではないかと考えられている。イソクラテスは修辞学校を開校しており、これはプラトンのアカデメイアと同時期のことであり、イソクラテスとプラトンはいわば商売敵だった。いや商売敵という世俗的な問題であれば話は単純なのだが、二人の教育に対する考え方は大きく異なっており、これは二

¹⁰ 例えばウォーターフィールドは、『エウテュデモス』の主要目的は見た目以上のものではなく、ソクラテス的な議論や教育論を一定の種類ソフィストの議論や教育論と比較してソクラテス側の正しさを訴えることであると説明している。もっともこれは、注釈書の解説という独自の性格を考慮する必要があるかもしれない。Waterfield, "Introduction to *Euthydemus*," p. 297.

¹¹ ハートリーは、この作品の「目的と哲学的意義」と「プラトンが『エウテュデモス』において誰を攻撃しているのか」を別個に論じている。R.S.W. Hawtrey, *Commentary on Plato's Euthydemus*, *Memoirs of the American Philosophical Society* 147 (Philadelphia: American Philosophical Society, 1981). またカーンもソクラテス対話法とソフィストの争論術との対比という伝統的解釈に従いつつも、当時のアテネの教育学的背景という歴史的条件を別に考えて、イソクラテスとアンティステネスに対する攻撃の可能性を考察している。Charles H. Kahn, *Plato and the Socratic Dialogue: The Philosophical Use of a Literary Form* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp. 321-324.

人の基本的思想が極めて対立していることから生じているという背景が存在した¹²。もっとも「哲学と政治の中間に従事する者」がイソクラテスを示唆しているというのは、定説ではあるが確定しているわけではない。しかしそれ以上に問題なのは、これがイソクラテスであるとしても、本編の部分で活躍している兄弟が展開している詭弁は、イソクラテスの思想を風刺する目的でプラトンが執筆したのかという疑問が残る。というのも、もしイソクラテスが「哲学と政治の中間に従事する者」として言及されているのであれば、それはエウテュデモスたちとはやはり区別されているからである。つまり「哲学と政治の中間に従事する者」は、弁舌は得意ではなく人前には出ないことになっているのであり、エウテュデモスたちとは異なった性格を与えられているからである。

そこでイソクラテスは、プラトンが風刺的に描こうとした敵の一人の候補者とはなるが、他の可能性が追求されることになる。そこで争論術的な傾向を持っていたメガーラ学派が候補者として登場する。トゥルベツコーイでさえもメガーラ学派も候補者となる可能性を実は認めている。だからプラトンは『エウテュデモス』を執筆する際にメガーラ学派を念頭に置いていたと断定する研究者もいる¹³。しかし 19 世紀以来の伝統的解釈では、むしろキニク学派とくにアンティステネスがプラトンの標的の第一候補として挙げられてきた。既に紹介したように、その場合もエウテュデモスとディオニュソドロスの詭弁のいくつかはアンティステネスにも当てはまる、あるいは部分的にこの兄弟の思想が当てはまると考えられていた。現代ではこうした考え方はより限定的に受け継がれている。ハートリーは、プラトンの侮辱的な表現のすべての背後に、そしてとくに『エウテュデモス』の背後に、アンティステネスを見ようとする 19 世紀の傾向は、もはや消滅していると説明し、『エウテュデモス』におけるいくつかの詭弁がアンティステネスを示唆している点だけを認めている。つまりトゥルベツコーイがほぼすべての詭弁にアンティステネスの哲学を見いだそうとしたのとは異なり、これを厳密に限定するのである。そして既に紹介したように、エウテュデモス達の詭弁の分析というのは、プラトン研究者のテーマの一つとなっているのであり、これは論理学の問題として分析されている。ハートリーは、プラトンのいわばターゲットになっている哲学者として、エウクレイドス、メガーラ学派、クレノマコス、ブリュソン、エウブリデスを挙げ、最後にイソクラテスを候補として指名している¹⁴。

以上のように、『エウテュデモス』における様々な詭弁は、誰かを皮肉に風刺している可能性は広く認められているものの、その候補者としては異なった可能性が挙げられている

¹² 二人の対立関係はよく知られているが、単に対立関係だけがあるわけでないことも指摘されている。バーネット著、出隆、宮崎幸三訳『プラトン哲学』岩波文庫、1952年、75-77頁。

¹³ ブラック著、内山勝利訳『プラトン入門』岩波文庫、1992年、99-100頁。但しブラックは『エウテュデモス』と同じように論理学と関わりを持つ著作として『クロテュロス』を挙げており、これはキニク学派の開祖アンティステネスを念頭に置いて書かれており、さらにはソフィストであるクロテュロスがエウテュデモスと近い存在であり、この点ではエウテュデモスとアンティステネスが接近する可能性があることを認めている。

¹⁴ Hawtrey, *Commentary on Plato's Euthydemus*, p. 28. 実際にはこれらの大半は、メガーラ学派の思想家であると言われている。

というのが定説である。したがって依然として哲学的な読解が難しい作品であり続けたいと言えよう。

4. トゥルベツコーイの解釈の特殊性

これまでの説明によりトゥルベツコーイの解釈の特性は明らかであるが、一応まとめ直しておこう。まずイソクラテスに関して説明しておく、彼はやはりプラトンが標的とした人物としては有力な候補になっており、それは教育学的に敵対関係があったことに由来しており、この点ではソクラテスの理論と対立していたと考えるトゥルベツコーイの解釈は極めて異例と言えよう。

他方、プラトンとの対立をもっぱらアンティステネスに見ようとするのが、トゥルベツコーイの特徴となるのだが、彼は部分的にはこうした見解を19世紀ドイツの研究者の観点として紹介している、まずトゥルベツコーイの時代の研究状況を考察する必要がある。ギフォードが『エウテュデモス』のテキストに注釈と解説を付けたものが1905年に刊行されており、ここで研究史も触れられているので、とりあえずこれを見ていこう。興味深いことにギフォードも『エウテュデモス』については、「一般的目的」と「特別な場合」に分けて論じており、前者では例によってソクラテスとソフィストの対比を言い、後者ではエピローグで示されているような苛立ちの対象となる思想家を推測している。まずリュシスが挙げられるが、その次にシュライエルマッハーの説としてアンティステネスが候補者として挙げられている。そして285D-286Bの部分は間違いなくアンティステネスが念頭に置かれており、それはアリストテレスの言及からも明らかであると述べられている。しかしギフォードもいくつかの部分はアンティステネスが弾劾対象であることは確かだが、すべてに当てはまるわけではないとして、それ以外の候補としては、ウィンケルマンが部分的にはトラシュマコフを挙げているのを支持している。またエピローグの謎の人物はイソクラテスであることは間違いないと確定している¹⁵。

以上のようにトゥルベツコーイ自身が述べていたこと、つまりアンティステネスを『エウテュデモス』のターゲットと見る考え方は当時言われていたもののそれを全面的に拡大することはトゥルベツコーイの独自の発想であることは確認されたわけだが、ここでいよいよアンティステネスについて述べておこう。彼はいわゆる三つのソクラテス学派の一つであるキニク学派の創始者とされている人物である。ソクラテスの最後に居合わせたというのは、プラトン自身の記述による。プラトンより年長と言われ、ソクラテスの弟子として大きな権威を持ち、教育者としても哲学者としてもプラトンと激しい敵対関係にあったと言われている。著作についてはかなりあったと想像されており、題名だけが今日に伝えられているものがいくつかある。

問題となるのはアンティステネスの哲学の具体的内容である。例えばヘーゲルの『歴史哲学講義』は、ソクラテス学派を三つとも採り上げておりキニク学派に関してはほぼアンティステネスを解説して代表させているが、哲学というよりも独自の道徳の提唱者として

¹⁵ Edwin H. Gifford, *The Euthydemus of Plato* (Oxford: The Clarendon Press, 1905), pp. 12-20.

叙述を進めている¹⁶。本稿で述べてきたような「反論理主義」にはいっさい触れていない。この「反論理主義」はどこから出てくるのかと言えば、アリストテレスの著作からである。『形而上学』にはアンティステネスに関する典型的な言及があるが、彼の見解を非常に短くしかも極めて悪意に満ちた書き方で要約している¹⁷。果たしてここから著作が残っていないアンティステネスの哲学が再構成可能かどうかが問題となるのだが、トゥルベツコーイはこの点では多くをツェーラーに依存している。また既に言及したようにギフォードもアンティステネスをプラトンの標的の一人と見なしているが、その際にもアリストテレスの証言と共にこれを解説したツェーラーの叙述を引用して、事実上は彼に多くを依存している¹⁸。問題なのは今日においてアンティステネスの哲学がどのように理解されているのかであるが、ハートリーは「アンティステネスの哲学について今日知られていることは、60年前に知られていたことよりもはるかに少ない¹⁹」といたずらっぽく述べて、アンティステネスの哲学については今日においてはほとんど何も判っていないことを認めている。実際のところ彼に関して判っているのは、様々な書物における彼に関する言及であるが、その大半はゴシップ的なものであり、そこから彼の人となりあるいはやや大げさに言えば倫理観が伝わってくるだけである。唯一の例外的な証言がアリストテレスによるいくつかの言及だが、繰り返すが哲学的な意味を取り出せるほどの長ささえ持っていない上、かなり悪意がこもっている。アンティステネスにとって不幸だったのは、彼の多くの著作の題名だけは残っていたので、多くの研究者はそれらの著作の内容を想像してみたくなり、それらをもとにしてアンティステネスの哲学を再構成したのである。しかしこうした試みは、20世紀以降の学問的厳密性に耐えうるものではなかった。つまり今日ではヘーゲル時代に状況は戻っていると言えるかもしれない。とはいえ、他方アリストテレスの証言は、『エウテュデモス』におけるいくつかの詭弁については、アンティステネスを示唆しているという証拠として、今日でも意義を失っていないのである。

以上のようにトゥルベツコーイの考え方は、当時のプラトン解釈にある程度影響を受けつつ、独自の発想を付け加えたものであり、かなり極端な結論を導き出していると言えるだろう。最後に彼の結論をどう考えるべきかを論じておきたい。

むすびに代えて

歴史的に見ると、トゥルベツコーイが導き出した結論は、現代の考え方から見ると無理があることは明らかである。『エウテュデモス』の密かな攻撃対象としてアンティステネス唯一人を指名することと、アンティステネスの哲学として「反論理主義」と唯名論を基礎

¹⁶ ヘーゲル著、長谷川宏訳『歴史哲学講義（上）』河出書房新社、1992年、462-463頁。

¹⁷ アリストテレス著、出隆訳『アリストテレス全集 12 形而上学』、岩波書店、1968年、188、278頁。

¹⁸ 他方、例えば George Grote, *Plato, and the Other Companions of Sokrates*, vol. 3 (London, 1865; Facsimile Edition, 2005), pp. 504-511. にはアンティステネスとキニク学派についてかなりの記述があるが、「反論理主義」の部分はない。

¹⁹ Hawtrey, *Commentary on Plato's Euthydemus*, p. 24.

とする哲学を再構成したのは、資料的に問題がある。後者については、アンティステネスの著書が発見されて、それがトゥルベツコーイの見解と一致するといったことが将来起こらない限り、彼の解釈は説得力を持ち得ない。しかしそれにもかかわらず、トゥルベツコーイがアンティステネスにこだわった点には、それなりの意義があるように思われる。

プラトンが創り出した登場人物にアンティステネスを見いだすというのは、『エウテュデモス』だけにおいて行われていることではない。註12でも紹介したが『クロテュロス』がそうだし、最も重要と思われるのが、『ソフィスト』である。『ソフィスト』に登場する「晩学者」なる人物がやはりアンティステネスを示唆しているのではないかとされているからである²⁰。もちろんこれらについても様々な見解があるようだが、その際にも証拠としてあげられているのは、アリストテレスの証言である。つまりプラトンが敵対的に描いた人物のすべてではないにせよある種の重要人物には、アリストテレスのアンティステネスに関する悪意に満ちた批評を思い起こさせるような部分が存在するという事は、これまでの研究から得られている定説だということである。

だからトゥルベツコーイの考え方を生かすには、アンティステネスという特定性を捨て去れば良いのだ。つまり様々な作品の中に、アリストテレスの証言を思い起こさせるような発言をする人物が現れ、これがプラトン（作品中ではソクラテス）と敵対関係にはいるということ自体はやはり重要な問題であり、トゥルベツコーイがこの重要性を捕らえていたことは間違いないだろう。つまり歴史的に誰がプラトンのターゲットになっていたのかという点にこだわりすぎて、それを特定化することに熱心になりすぎて無理をしたのだが、むしろ逆にどのような思想をプラトンが敵対視していたのかを突き止めて、その内容の特定化を図ればより実り豊かだったように思われる。さらに言えば、プラトンはソフィストという形で敵対者を描き、それをソクラテスと対置させたのであるから、ソフィスト全体の哲学とは何かを考察すべきであったのかもしれない。

しかし彼はプラトンが対決した思想の重要性は深く認識しており、しかも彼はそれは古代ギリシャにおいて解決された問題としては捉らえていないのである。彼は当然のことながら、アンティステネスとプラトンの戦いは後者の圧倒的勝利に終わり、それ故にこそ哲学の可能性が開けたとやや楽観的に宣言しているにもかかわらず、実は以下のように極めて用心深く半ば警告を発している。

プラトン自身が別の諸作品の中で、キニク学派の「反論理主義」の基本には彼も最終的

²⁰ 納富信留著、『ソフィストと哲学者の間：プラトン『ソフィスト』を読む』名古屋大学出版会、2002年、64頁、末72頁、末78頁。なおこの本では、アンティステネスの哲学については、やはり資料不足で彼の哲学を再構成することには無理があることが説かれ、むしろ歴史的に誰がという問いかけよりも、ソフィストの思想内容自体を解明することの重要性が主張されている。なお日本人による『エウテュデモス』論としては、Shinro Kato, “The Crito-Socrates Scenes in the *Euthydemus*: A Point of View for a Reading of the Dialogue,” in Robinson and Brisson, eds., *Plato Euthydemus, Lysis, Charmide*, pp. 123-132. が挙げられるが、題名からも判るように、極めて専門性の強いものである。

決定を下すことができなかつたような深刻な諸問題が存在している、ということをお我々が理解することを可能にさせている。アンティステネスの抽象的な唯名論的個体主義は、プラトン自身の抽象的普遍主義の対立物である。アンティステネスは個別的なもの、特殊なものの現実性を認め、一般的なものの現実的本質を否定する。逆にプラトンは真なる存在を思弁的なもの、普遍的なものだけに帰して、あらゆる個別的なもの、感覚的なもの、物的なものを一時的で架空のものとして見なす。ここで唯名論と实在論の間の論争が生じ、この論争は中世の時代に長々で行われる運命にあつたし、その後も今日に至っている。スコラ哲学がいかに早くから生じていたのか、それが理解の哲学のゆりかご自体でソフィズムといかに密接に隣接していたのかを『エウテュデモス』は我々に示している<21-22> [強調は原文]。

つまりトゥルベツコーイ自身の哲学的な価値判断によれば、プラトン哲学の勝利は確定しているはずなのだが、実際にはプラトン哲学の敵対勢力も依然として力を持っていることになり、従つてこの対立は現在まで継続していると彼は考えていたのである。だからこの『エウテュデモス』論も哲学史的意味合いだけでなく、彼自身の哲学的な立場の表明とも考えられるのである。

このように、トゥルベツコーイが「反論理主義」の哲学に同時代性を見てとり、しかもその起源を強引に一人の人物に代表させようとしていたことを念頭に置くと、彼がしたことと同じことを我々もしたくなる。つまり、トゥルベツコーイがプラトンの描いたエウテュデモスの背後にアンティステネスを見たように、我々もトゥルベツコーイの描いたアンティステネスの背後に誰かがいるのではないかと想像したくなる。トゥルベツコーイがアンティステネスにこだわり、彼をこれほど批判的に描いているのは、実は同時代の誰かを念頭に置いているのではないかと疑いたいということである。

候補者としては、第一に当時の唯物論者達が挙げられる。トゥルベツコーイは唯物論を批判し観念論の復権を強く訴えた論文集『観念論の諸問題』(1902)にも参加しており、当時の観念論側の代表的な哲学者の一人だったのである。そして『エウテュデモス』論においても「キニク派は粗雑な唯物論である」と述べ、さらに以下のように主張していた。

この反論理主義的な学説は、思想の極端な原子主義でありそれは認識された現実の内容すべてを何らかの個々の最終的要素へと分解し、この諸要素はそれらの中での論理的な結びつきに至ることが出来ないのである。

唯物論があらゆる要素を細分化して、それらを最終的には自然科学による解明に任せており、それを知の進歩として提示しているが、実際にはこうした細分化により、むしろ無知なる領域が拡大していくだけで悪無限に陥っているだけであるというのは、観念論側の代表的な主張の一つである。しかし唯物論を標的と考えるのは若干無理がある。トゥルベツコーイが「反論理主義」と名付けている思想の枠組みでは、何らかの統合的な枠組みを

創り出すことを根底的に否定しているのであり、これに対して唯物論は明らかに統合的なシステムの構築を求めている。このシステムはもちろんロシアの当時の観念論哲学の信奉者達から見れば、きわめて無意味で有害なものということになるのだが、しかしともあれ何らかの体系の構築を試みている以上は、ここで言われている発想とは異なっているので、唯物論は部分的な候補者にしかならない。

ではこのように哲学的なシステムの解体を主張していた思想家がトゥルベツコイの時代に存在したのかと言えば、まさに存在していた。言うまでもなくニーチェである。ニーチェの思想のロシアおよびソヴィエト文化に対する影響の強さに関しては、ここで研究書を列挙する必要がないほど強烈であり、それがまさに始まったのがこの時期である。トゥルベツコイはかなり早くそれを知る位置にいたはずである。

彼も所属していたモスクワ心理学協会の書記として活動していたプレオブラジェンスキーは、早くからニーチェ信奉者として有名であったし²¹、『観念論の諸問題』でもフランクはニーチェへの接近をあからさまに訴えていた。トゥルベツコイの専門がギリシャの宗教と哲学であることを考えると、ギリシャ文化の専門家として脚光を浴び、当時のヨーロッパの論壇の話題の主となっていたニーチェを意識していないとは考えられない。しかし彼の著作においてはニーチェに関する記述が極めて少ない。左記に述べたプレオブラジェンスキーが早々と死去してしまった際には、モスクワ心理学協会機関誌『哲学と心理学の諸問題』誌は追悼特集を組み、トゥルベツコイも寄稿しているのであるが、プレオブラジェンスキーがニーチェに魅了されていたことは言及されているものの、とくにニーチェの哲学に触れることはずっと回避され、唯一プレオブラジェンスキーは哲学的才能があまりにも豊かであったがために懐疑主義に至ったことが述べられている²²。プレオブラジェンスキーが熱中していたニーチェの哲学に触れないのは追悼文としてはおかしいのだが、そうすると批判的な内容が語られずにはすまされなくなり、逆に追悼文には相応しくなく内容になることを恐れているとしか考えられない。しかもトゥルベツコイのギリシャ哲学史においては、ソフィストの思想が懐疑主義と特徴づけられている。つまりソクラテスとプラトンの思想の基本的な敵を特徴づける思想が、プレオブラジェンスキーというニーチェ主義者の帰結だったのである。前述の『観念論の諸問題』では、フランク以外にもベルジャーエフ、アスコリドフ、ブルガーコフ、ジュコフスキーがニーチェについて言及しており、トゥルベツコイはこうしたニーチェの流行に非常に幻滅して、『観念論の諸問題』に参加したことを後悔したと伝えられているので、ニーチェの哲学に否定的であったことは確かであろう²³。

いずれにせよトゥルベツコイの著作全体においてもニーチェへの言及はあまりにも少

²¹ 但し当時のモスクワ心理学協会にあっては、プレオブラジェンスキーのニーチェに対する崇拜的な姿勢は評価されない傾向があった。

²² Трубецкой С.Н. Памяти В.П. Преображенского // Собрание сочинений Кн. Сергея Николаевича Трубецкого. Т. 1. М., 1907. С. 328-343.

²³ B.G. Rosenthal, "Introduction" to *Nietzsche in Russia* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1986), p. 18.

なく、ニーチェを本格的に論じた論文はない。しかし逆にこの徹底的な不在は、ニーチェ哲学に対する激しい警戒感ないしは敵対心を示していると考えられるべきではないだろうか。

ニーチェは西欧哲学の無効化あるいは徹底的な読み直しを試みたが、その際に西欧哲学の根元として念頭に置いていたのがプラトン哲学であった。この意味ではソクラテスに始まりプラトンにより築かれたギリシャ哲学の伝統をまさに浸食し解体し始めていた思想がまさにロシアに大流行し始めようとする際に、ロシアにおいてはプラトン受容の一つのピークがソロヴィヨフらを中心として形成されていたというのは、歴史的な皮肉としか言いようがない。しかしこの点は、ロシアにおけるプラトン受容における重要なファクターとして把握しておくべきことであろう。ただし補足しておけば、20世紀において従来の哲学を脱構築しようとした思想家達が、プラトンを否定するというよりも、むしろプラトンを再読するという形を採用しており²⁴、この点ではプラトンという古典の奥行きを認めねばならない。そしてロシアにおいてもこうした新しいプラトン読解が徐々に開始されていったのもこの時期のことになりそうであるが、それは本稿の課題からははずれる。

結局トゥルベツコーイはこれ以降、プラトンの敵対者の問題にも、ニーチェの問題にも本格的に取り組む時間はなかった。だから残された彼のソフィストに関する考察は一定の重要性を持つのであるが、その分析については今後の課題としたい。

²⁴ 例えば Catherine H. Zuckert, *Postmodern Platos: Nietzsche, Heidegger, Gadamer, Strauss, Derrida* (Chicago: University of Chicago Press, 1996). を参照。